

## 実践事例.06

生徒全員が英語による  
ディベートにチャレンジする  
プログラムを实践

茨城県立竹園高校

グローバル・コミュニケーション  
能力の育成に取り組む

竹園高校の創立は1979年。当時、つくば市は研究学園都市として開発が進んでおり、研究機関に勤務する外国人も増えている状況にあった。そのような環境を踏まえ、同校は当初から国際教育と科学教育に力を入れてきた。

1994年には茨城県で初めて国際科を設置。2003年には、茨城県教育委員会の指定を受け、国際科を対象に「ESP（イングリッシュ・シャワー・プログラム）」をスタート。使える英語の修得に取り組む。そして、指定事業終了後の2006年、ESPを継承するかたちで、普通科、国際科の両方を対象とした同校独自の英語教育プログラムを立ち上げる。それが現在も続いている「ACE（アース）プログラム」だ。

「ESPの時代からアドバイザーをしていた立教大学の松本茂教授の協力を得て、英語科の教員が丸となって検

討を加え、新たに内容を整備しました。ねらいはコミュニケーション能力、特に発信力の強化です」（笹目俊夫校長）

このACEプログラムの核となるのは、グローバル・コミュニケーション能力を段階的に養っていく「プロジェクト」と呼ばれる取り組みだ（左図）。学年ごとに主に2つのテーマを設け、英語の授業を通してトレーニングを重ね、目標を達成していく。なかでも高校生にとってはハードルが高いと思われる。英語によるディベートを2年次のテーマとしている点と同プログラムの特徴的な点といえる。

では具体的にどのようなアプローチで、ディベートが可能なレベルにまで生徒の力を伸ばしていくのだろうか。プログラムの具体的な内容は次のとおりだ。

1年次のプロジェクトは「レシテーション（暗唱）」と「プレゼンテーション」。

「レシテーションは、英語で大きな声で話すことに慣れることが目的です。さらに発音もこの段階で矯正していきます。1年次の後半に行うプレゼンテーションは、4人程

校長  
笹目俊夫先生英語科  
植木明美先生

## School Data

1979年創立 / 普通科・国際科 / 生徒数961人(男子456人・女子505人) / 進路状況(2012年度実績) 大学83.1%・専門学校0.9%・受験準備15.6%・その他0.3%

度のチームを編成し、パワーポイントなども用いて、クラスの中で発表。レシテーションを通して人前で話す度胸をつけているので、生徒も戸惑わずに取り組むことができます。また、プレゼンテーションの準備を通して、2年次のディベートで必要となるリサーチ力についても少し意識させるようになっています」（英語科／植木明美先生）

同時に年間を通して「多読」にも取り組む。生徒が自分自身のレベルに応じて、3万語を目標に、絵本からペーパーバックまで難易度の違うさまざまな英語の本を読むことで、リーディングの力を養う。

さらに、1年次には「道徳」の授業などで日本語によるディベートを実施。ディベートの基本を学び、2年次に備える。

2年次に英語による  
ディベートに挑戦

2年次のプロジェクトは「スピーチ」と「ディベート」。英語の授業時間を利用して、9月にクラスごとにスピーチの発表会を、

合わせて、国際科は6月、普通科は1月にディベートの試合を実施する。

「1年次のプレゼンテーションはチームでの発表ですが、スピーチは1人。そこで、より説得力のある、相手の共感を得られる表現力を養います。ディベートは、クラス内でチーム分けをして試合形式で行います。毎年全国高校生英語ディベート大会の論題で、それぞれ賛成・反対の立場に立つてディベートの技能を競います」（植木先生）

3年次は「ディスカッション」（国際科は「模擬国連」と「エッセイライティング」）に取り組む。ディスカッションは、これまでにやってきたことの集大成として、与えられたテーマに関してグループで議論。さらにそのテーマに関する自分の意見をエッセイにまとめ、コンテストを実施する。

このように、プロジェクトは、3年間を通して、身につけたことが常に次のステップに生かされるよう設計されている。

このほか国際科独自の取り組みもある。同校では1年次は普通科・国際科の区分はなく、2年次から国際科2クラス（文系・理系）が設けられる。この2年次には年間を通して課題研究に取り組むが、その一環として、シンガポールへのスタディツアーの際、現地の大学で英語による研究案の中間発表を行う。

また、授業以外に、普段の学習の成果を試す機会も豊富だ。6月の文化祭「尚志祭」では、希望者が参加する校内英語スピーチコンテストを実施。上位入賞者は学

取材・文 / 伊藤敬太郎

### 「プロジェクト」の流れ

**3学年**

1) ディスカッション 2) エッセイ

● 到達目標  
1) 与えられたテーマについての英文を読み必要な情報を得るとともに、お互いの意見を尊重して合意を形成するために話し合うことができる。  
2) ディスカッションのテーマについて自分の意見を論理的にかつ正確に書くことができる。  
3) 大学入試レベルの英文を速く、正確に書くことができる。

**2学年**

1) スピーチ 2) ディベート

● 到達目標  
1) 相手の意見にその場で対応しつつ、その意見を踏まえ、論理的に自分の意見を主張できる。  
2) ディベートの論題について、自己の主張が一貫した文章で書ける。

**1学年**

1) レシテーション 2) プレゼンテーション  
※多読プログラム

● 到達目標  
1) 論理的にまとまりのあるプレゼンテーションが自信をもって原稿を見ないでできる。  
2) 多くの英文(3万語が目標)を読み、英文を読むスピードを速くすることができる。



2012年度全国高校生英語ディベート大会(千葉県)では3位に入賞した

次のこの一連のプログラムにおける指導のポイントを見ていこう。

まず、英語の授業は原則としてオールイングリッシュで実施。また、常勤講師1人をはじめ、非常勤、ALTを含む13人のネイティブスピーカーをそろえ、スピーチやディベートなどの指導やそのサポートに当たる。このように、生徒が授業のなかで自然と生の英語に触れ、英語でコミュニケーションする環境が作られている。

もう一つのポイントが、プロジェクトの指

導に関して、原則として教科書を教材としている点だ。オリジナルのワークシートを活用して、文章の要約や分析、ペアワークやグループワークによるリフリーズ(言い換え)やノートテイキングなど、スピーチやディベートの基礎練習を重ねる。

この方法を探ることで、プロジェクトのために教科書の学習がおろそかになることもなく、同時に前述の基礎練習を継続的に行えるのである。

また、ディベートなどのコミュニケーション教育では、生徒同士で学び合う波及効果が生まれてくる。ディベート大会で活躍した英語部の生徒がほかの生徒にいい刺激を与えているという。

笹目校長はディベート活動を重視する理由についてこのように語る。

「日本語の特質や日本人の気質は本来、ディベートには向かないものだと思います。しかし、グローバル化が進展するなかで、これから社会に出て行く人材には確実にその能力が求められる。だからこそ、高校生

の時期に基礎をしっかりと固めておくことが大切なのです。また、自分の意見を発信していくためには、前提として聴く力、読む力も求められる。論理的なものごとを考える力も必要です。それらを総合的に習得するために、ディベートは非常に効果的だと考えています」

ACEプログラムはスタートから8年めを迎え、その成果も着実に表れている。前出の全国高校生英語ディベート大会の成績はここ2年で急上昇。英語コミュニケーション能力を測るGTECの成績も目に見えて伸びた。さらに、生徒を対象に実施したアンケートでも約4分の3の生徒が「コミュニケーション能力が伸びたと感じる」と回答している。

「なかには私たちの予想を超えたスピードで成長する生徒もいますし、普段はおとなしいので心配していた生徒がディベートの試合で思わぬ力を発揮することもあります。生徒の潜在的な力には測り知れないものがあります」(植木先生)

### プロジェクトは教科書を教材に実践していく

外のコンテストにも参加している。ディベートに関しても、英語部の生徒が、茨城県内の英語ディベート大会のほか、全国高校生英語ディベート大会にも代表として例年出場。2012年度は竹園高校チームが全国3位となり、1人が同大会のベストディベーターに選ばれた。

この時期に基礎をしっかりと固めておくことが大切なのです。また、自分の意見を発信していくためには、前提として聴く力、読む力も求められる。論理的なものごとを考える力も必要です。それらを総合的に習得するために、ディベートは非常に効果的だと考えています」

ACEプログラムはスタートから8年めを迎え、その成果も着実に表れている。前出の全国高校生英語ディベート大会の成績はここ2年で急上昇。英語コミュニケーション能力を測るGTECの成績も目に見えて伸びた。さらに、生徒を対象に実施したアンケートでも約4分の3の生徒が「コミュニケーション能力が伸びたと感じる」と回答している。

また、当初課題だったのが、オールイングリッシュで授業を進めると、なかにはついてこれない生徒が出てきてしまうこと。その対策としてはパワーポイントが大きな助けになりました。

ディベートに関しても、最初は試合で話せなくなってしまう生徒もいたんです。そこで、普段の授業で行うリフリーズのペアワークなどを強化したところ、その問題は解消してきました。今の課題は論理性を磨いていくことですね。(植木先生)

### 実践のポイント

**教科書との融合を重視し副教材を工夫しています**

◎ プロジェクトの設計や運営でどのような苦勞がありましたか？

プロジェクトと教科書をいかに融合させるかということですね。教科書の内容を理解しつつ、同時にプロジェクトの訓練にも生かせるよう、ワークシートなど副教材は毎年工夫を重ねて作成しています。

また、当初課題だったのが、オールイングリッシュで授業を進めると、なかにはついてこれない生徒が出てきてしまうこと。その対策としてはパワーポイントが大きな助けになりました。

ディベートに関しても、最初は試合で話せなくなってしまう生徒もいたんです。そこで、普段の授業で行うリフリーズのペアワークなどを強化したところ、その問題は解消してきました。今の課題は論理性を磨いていくことですね。(植木先生)

◎ 一連の取り組みが成果を挙げた要因は？

現在のかたちになるまでには多くの試行錯誤を重ねてきました。その意味で、現場の人の力が大きい。英語科教員団の熱意と継続的な努力の賜です。そして、まだまだこれからも発展していくプログラムだと考えています。(笹目校長)